**編集後記**：これまで，オンライン天気のページ（http://www.metsoc.jp）に「『天気』は1954年に創刊された日本気象学会の機関誌で，年12回発行されます．」と書かれていました．これについて会員の方から，「機関誌になったのは1956年からですよ」というご教示を頂きました．ありがとうございました．

1954年5月の創刊号には「“天気”は日本気象学会の月刊雑誌として発足する．」と書かれ，以下のように続いています．「本誌が発刊される（略）一番有力なきつかけとなつたのは何といつても地方在住会員の強い要望である．本誌が直接気象現象を観測しておられる方，第一線で気象事業に従事しておられる方，そのほか農業気象や応用気象などにたずさわつておられる方の調査，研究等の小論文の発表機関になれれば最大の目的は達せられたといつてよいであろう．」

機関誌になった1956年1月号には，畠山久尚理事長による「新発足の辞」が掲載されました．当時，すでに日本気象学会の機関誌として「気象集誌」がありましたが，畠山理事長はイギリス気象学会に“Quarterly Journal”（Quart. J. Roy. Meteor. Soc.）と“Weather”，アメリカ気象学会に“Journal”（J. Meteor., 後のJ. Atmos. Sci.）と“Bulletin”（Bull. Amer. Meteor. Soc.）等があることを例に挙げ，「“天気”の編集者はおそらく頭の中に“Weather”と“Bulletin”とを描きながら，日本の気象界の事情を考え合わせて今読者の前に配られたようなものを作り上げた．」と書いています．

それから約60年にわたり，「天気」は国内の気象研究者に情報交換の場を提供してきました．しかし，第一線の気象事業に携わっている会員の調査研究を発表するという創刊時の目的が達成されたかどうかとなると，物足りないところがあります．「天気」編集委員会では，「調査ノート」の導入や「気象のABC」の連載など，研究を本務としない会員と先端的な研究者の橋渡しになる企画を進めてきましたが，今後も読者の多様な要望に応えていけるよう工夫していく所存です．そのため，会員の皆様方からの建設的なご意見，ご提案をお待ち致します．「新発足の辞」にも次のように書かれていました．

「学会の機関誌は会員皆の雑誌なのだから，恐れることなく価値のある論文をどんどん投稿されたい．またこの雑誌をよくしてゆくことは会員皆の責任でもあるのだから，そのことについての意見もどしどし編集者あてに寄せられたい．」

引き続き「天気」をよろしくお願い致します．

（藤部文昭）